巻頭言

現代宗教研究所所長　三原正資

『没落する文明』（菅野稔人・神里達博　集英社新書　二〇一二年）の中で著者は、経済史家アンガス・マディソンの研究を引用して次のように述べている。

彼は……人類が経済成長というものを経験したのはたかだか一八二〇年以降の、ごく最近のことにすぎないということを実証しました。一世紀から一九世紀初頭までは、一人当たりの所得で見た世界経済はほとんど成長していない。いまでは当たり前のもののように思われている経済成長という現象は、じつは考えられている以上に「新しい」現象なんですよ。

そして、人口減少に直面している日本は「縮小状態」にいるというのが正しい認識です、と感想を記す。

さらに続いて、キリスト教や仏教を産み出した古代文明は、ある時期に木材というエネルギー源を消費し、使い切ったがために、脱物質文明化していったのではないかと推測している。

ところで法華経の、例えば普賢菩薩勧発品第二十八は、法華経を実践するものについて

是の如きの人は亦世楽に貪著せじ。

是の人は三毒に悩されじ。

などと説いたのちに、よく知られた「少欲知足」の一句を示す。

あるいは、譬喩品第三に説かれる、長者の「大宅」を説明する一節を読んでいただきたい。

其の宅久しく故りて　復頓弊し　堂舎高く危く　柱根摧け朽ち　梁棟傾き斜み　基陛頽れ毀れ　墻壁圮れ坼け
泥塗褫け落ち　覆苫乱れ墜ち　椽梠差ひ脱け　周障屈曲して　雑穢充遍せり

国王か国王と等しい威勢をもつとまでいわれた長者の大宅の無惨な様子が描写されている。まさに落日の古代文明を象徴するかのような一節ではあるまいか。

過日、島根県大田市温泉津町恵珖寺（加藤智士住職）へ向かったときのことである。山々のふもとの彼方此方に廃屋が散見され、そのありさまは、この譬喩品に説かれた「大宅」の描写と何ら変わらなかった。その荒れ果てた家屋は、周囲にある草におおわれた耕地とともに、地方の崩壊を物語るものだった。

恵珖寺が維持管理する「宿坊米子屋」が提供する宿坊体験は、二〇〇七年、石見銀山とともに世界遺産に登録され、歴史的景観が保存された地区にある寺院の官民一体となった地域振興のこころみの一つである。

恵珖寺の近くにある温泉津の町並に面した米子屋は、江戸時代末期の町家を保存復元したものだった。外観は、棟は低く小振りな建物である。引き戸を開けて内部に入るとほの暗く、頭上の桁には釿の跡が見える。土間の奥には、障子やふすまで仕切られた四畳ほどの部屋が田の字に続いている。

その夜は奥の部屋に宿泊したのだったが、狭い部屋が、なぜ、これほどまでに心地よい空間に変わるのか、不思議でならなかった。二世紀前までの日本に生きていた「方丈」の豊かさ、「少欲知足」を体験したとしか言いようがなかった。

近代、ことにアジア・太平洋戦争に敗けた日本人は戦勝国アメリカの文化にあこがれの思いをもった。マイホームを手に入れ、マイカーを乗り回し、欲望につき動かされて、半世紀余り走ってきた私たちの未来に待ち受けているものは何か。巨きくなりすぎたかのような現代のシステムを支える原子力文明を、私たちは果たしてコントロールできるのだろうか。

荒廃していく地域に生きる寺院・檀信徒には、ダウンサイジングを前提とする、地域住民と一体となった新たな活動が求められている。